

鷗友学園女子中学校

2010年度

入学試験問題（2次）

【国語】

時間 50 分

【注意】

1. 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2. 問題は全部で12ページあります。試験中に汚れや不足しているページに気づいた場合は、監督^{かんとく}の先生を手をあげてよんでください。
3. 問いに字数指定がある場合には、句読点なども1字分に数えること。

受験番号	氏名

一 メイダとグレイスはビーハイブ百貨店の女店員です。次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

メイダは、八か月間、食べるものもろくに食べないで十八ドルためた。その金で紫色のドレスをつくるための生地やなにかを買い、シュレーゲルの店にも仕立て代の半金として四ドルを先払いした。残りの四ドルは、感謝祭の前日にはどうかしはらせる予定だった。そうなればメイダは、感謝祭には新しいドレスが着られる——世のなかに、これほど魅力のあることがほかにあるだろうか。

ビーハイブ百貨店の店主の老バッチマン氏は、毎年自分の百貨店の従業員たちを招待して、感謝祭の正餐をともにすることをしきたりとしていた。そして、その後の三百六十四日つまり一年間ずっと、日曜日は例外だが、毎日のようにそのときのダイナーが楽しかったことを思いださせては、このつぎのダイナーを期待させ、店員たちの仕事のはげみとしてきたのである。

このダイナーは、店の中央の細長いテーブルを利用して開かれることになっていた。おもての窓はつつみ紙をびようとめてかくし、七面鳥その他のいろいろなごちそうは、角の料理店が裏口からはこびこんでくるのだった。ビーハイブ百貨店が、エスカレーターがあつたりポンパドール型の髪をした女店員がいたりするような大百貨店ではないということは、諸君もすぐにお気づきになれるはずである。まあ、商品陳列所とでもいったような規模の小さい百貨店なのである。気軽にはいって買って買物ができるし、またかんとんに出ていけるような店である。それから例の感謝祭晩饗会には、いつもきまってラムゼイ氏が——。これはしくじった！ そうだ、ラムゼイ氏のことをなによりもさきにいわなければいけなかったのに。ラムゼイ氏は、紫よりも緑よりも赤いツルコケモ・ソースよりも、もつともつと重要な人物なのだから。

ラムゼイ氏は、この百貨店の店員主任なのである。ほかの人はどう思っているか知らないが、わたしは、このラムゼイ氏をりっぱな人物だと思っている。彼は、店のすみの暗がりや、とおりすがりに女店員の腕をつねったりするようなまねは、一度もしたことがない。店のひまなときなどには、彼は女店員たちに冗談話をしたりする。すると話をきいた娘たちはくっくつとわらい、「まあ、いやだわー」などといつて、けたたましい声をあげたりする。しかし彼女たちは、けっしてラムゼイ氏を道化役者あつかいにしているわけではないのだ。

ラムゼイ氏は紳士だったし、なおそのうえに奇妙な、いっふう変わったところがある人物だった。奇妙な健康法を信じてい

て、人間は、自分のからだが要求するような食べものは、ぜったいに食べてはいけないという考えをもっているのである。からだを気ままにさせたり、吹雪ふゆきの日に家のなかにとじこもっていたり、オーバー・シューズなんかをはいたり、菓をのんだりするなど、とかく自分をあまやかすようなことをするのはなにによらずぜったいに反対なのである。

この店につとめる十人の女店員は、ひとりのこらず、ラムゼイ氏のおくさんになるという夢を——つまりポークチョップに玉ねぎフライがそうように、ラムゼイ氏にそいたいといったようなことを、毎晩のように夢見ていたのである。というのは、老バツチマン氏が、来年にはラムゼイ氏を共同経営者に昇格しょうかくさせることにしていたからである。十人の女店員たちは、ひとりのこらず、自分がラムゼイ氏をとりこにしたら、ふたりの結婚式けっこんのお菓子かしがまだ胃のなかにおさまりきらないうちに、あんな変てこな健康法なんか、きれいにやめさせてみせる、と思ひこんでいたのである。

ラムゼイ氏は、いつも感謝祭のディナー・パーティーの司会者をつとめることになっていた。イタリア人の楽士がふたりきて、バイオリンとハープをひき、ダンスもちよつとやることになっていた。

こうして、ラムゼイ氏を自分のものにしてしようとして、二枚のドレス——^①紫色のドレスと赤いドレスと——が、ここに用意されかかっているというしだいなのである。

もちろん、ほかの娘たちだってドレスを着ていくにはちがいない。だが、それは問題にならなかった。彼女らの着ていくものは、せいぜい、シャツブラウスに黒のスカートといったていどの品物にきまつているのだから——紫色や赤のような、目もまばゆいしろものは、このふたりの服以外にはぜんぜんないのである。

グレイスも、そのために金をためてきたのだ。彼女は、既製品きせいのドレスを買うつもりだった。わざわざ仕立て屋に仕立てさせたりなんかする必要がどこにあるだろう——自分のようにととのつたからだつきをしている娘には、既製品でじゅうぶん、からだにあわせることができる——既製品の服というものは、欠点のないからだつきをした人間にあらうようにこしらえてあるんだから——ただ腰こしのところをちよつとちぢめさせさえすれば、それでいいわ——なにしろふつうのからだつきの人は、やたらに大きな腰をしているのだから——と、ざつとまあ、こんなふうにグレイスは思ったのである。

※ 感謝祭の前夜がきた。メイダは、あしたのことを思って、はりつめた輝かがやかしい気持ちを抱にだきしめながら、いそいで家には帰ってきた。メイダは紫色のことばかり考えて、そのことが頭をはなれなかった。けれども彼女の気持ちそのものは純白——

若い人がそれをもたなければしぼんでしまうだろう快樂への情熱、たのしい青春の情熱の色——だったのだ。

メイダは紫色がよく似合うことを知っていた。そして——それはもう、これで千度めだが——紫色こそラムゼイ氏がいちばんすきだといった色であり、ぜったいに赤なんかじゃない、と自分にいいきかせようとしていた。メイダは、家に帰ったらまず薄紙でつつんで化粧台のいちばん下のひきだしにいれてある四ドルのお金を取りだして、シュレーゲルの店へ支払いにいつて、自分でドレスを持ってくるつもりだった。

グレイスも、メイダとおなじ建物に住んでいた。メイダのへやの上のおもてのへやを借りていたのである。

メイダが家に帰ってきてみると、家のなかがなんだかざわめいていた。^②家主のおかみさんの舌が、バター・ミルクをひつきまわす泡たて器みたいに、廊下じゆうを、すっぱくかきみだしていたのである。つづいてグレイスが、どんなに赤いドレスにも負けないくらいにまっ赤に目を泣きはらして、自分のへやからかけおりにきた。

「あのおにばあつたら、あたしに出てゆけていうのよ」と、グレイスはいった。「へや代の借りが四ドルたまっているからなの。あたしのトランクを廊下におっぱりだして、あたしのへやにかぎをかけてしまって、なかにはいらせないのよ。あたし、ほかにどこへもいくところなんかはないわ。お金だって、一セントもないし。」

「きのうは、あなた、お金をもっていたじゃないの」と、メイダがいった。

「ドレスを買うのにつかっってしまったのよ、へや代は来週まで待ってくれると思ったものだから。」

くすくすんと、鼻をすする音、すすり泣きの声。

メイダは、だいたいな四ドルをだしてきた——ださずにはいらなかったのだ。

「あなたは、ほんとにいい人ね」と、グレイスは感激して叫んだ。グレイスの表情は、まるで夕暮れが虹に変わったほどに明るくなった。「あたし、さっそく意地悪のおにばあにへや代をはらってやって、それからドレスを着てみることにするわ。あんたも、あたしのへやにきて、ちよっと見てくれないか？ お金は、毎週一ドルずつお返しするわ——まちがいなく、きつとお返しするわよ。」

さて、感謝祭の当日。

ディナーは正午からはじまる予定だった。十二時十五分まえに、グレイスがいなすまのようにさつとメイダのへやにはいつて

きた。たしかに、ほれほれするようなすがただった。赤は、グレイスによく似合っていた。メイドは、着ふるしたチェビオのスカートに青色のブラウスがたで、窓べにすわって、かがりものを——おお、いじらしくも彼女はししゅうなどしているではないか。

「まあ、どうしたの？ まだ服を着かえていないの？」赤いドレスを着た娘は、かん高い声をはりあげた。「うしろのほうも、ちゃんとなつてゐるかしら？ このビロードのたれ、すてきだと思わない？ メイダ、あんたはまたどうして、まだ服も着かえないでゐるの？」

「ドレスがまにあわなかったのよ」と、メイドはいった。「だから、あたしはダイナーにはいかないつもりなの。」

「まあ、それはお気のどくねえ。ほんとに、心から同情するわ、メイダ。でも、なにかほかのものを着ていったらいいじゃないの——お店の人たちだけなんだし、あの人たちは、そんなことちつとも気にしやしないわよ。」

「あたしは、紫色のドレスを着ていくことにきめていたのよ」と、メイドはいった。「だから、それが着ていけないとなったら、いっせんせんいかないほうがいいの。あたしのことなんか気にかけないでね。早くいかないと、おくれるわよ。あんたは赤がよく似合つて、すてきだわ。」※

長い午前中と店でのダイナーの時間がすぎていくあいだ、メイドは自分のへやの窓べにすわりつづけていた。

女店員たちが、黄色い声をはりあげて鳥の骨をかじつてさわいでゐるのや、老バッチマン氏がつておきの冗談をとぼしては、とどろくような声でわらつてゐるのがきこえてくるような気がした。また、感謝祭の日にだけ店にやつてくる、ふとつたバッチマン夫人のダイヤモンドや、みんなのせわをやいてきびきびと親切にうごきまわつてゐるラムゼイ氏のすがたが、目に見えるようになった。

午後の四時に、メイドはしよんぼりしてシュレーゲルの店へいった。そして、ドレスの仕立て代の残りの四ドルがしはらえなくなったことのいいわけをした。

「なにをバカナ！」と、シュレーゲル氏はおこつたようにいった。「なんだつて、そんなに陰気な顔をしていなさるんだね？ さつさと持つていつてくれたらいいじゃないか。ちゃんとできあがつてゐるんだから。お金なんざ、いつでもはらえるときにはらつてくれりゃあ、それでけつこうだよ。もうこれで二年間も、あんたが毎日うちの店の前をとおるのをあつしは見てきたんだ。」

仕立て屋なんかしていたって、あつしだつて人の心が読めないような人間じゃねえつもりだよ。金は、はらえるときにはらつてくれりゃあ、それでけっこうさき。さあ、ドレスを持っていつておくれ。りっぱにしあがつているよ。あんたが着なすつたら、さぞかきれいに見えることだろうて。そうとも、はらえるときにはらつてくださりゃあ、それでいいんだよ。」

メイドは、のどがつまつて、感謝の気持ちの百万分の一もつたえることができないままに、そこそこに店を出た。店を出たときに、さつとふつてきた雨が、メイドの顔にあたつた。メイドは、うれしさに顔をほころばせて、雨なんぞ感じもしなかつた。馬車を乗りまわして買い物をするご婦人がた、あなたがたには、わかりはしないのだ。ご自分の衣装代がみんな、おとうさんのさいふから出るお嬢さん^{じょう}がた、あなたがたには、わかりかけもしないのだ——^③あなたがたには、なぜメイドが感謝祭の日につめたい雨を感じもしなかつたか、わかるはずもないのだ。

五時に、メイドは紫色のドレスを着て、町へ出ていった。雨はいつそうはげしくなつていて、風にあおられて、やむことなく、なぐりつけるようにメイドのからだにふりそそいだ。人びとは雨がさをからだにくつつけるようにしてさし、レインコートのボタンをきつちりとかけて、家や乗り物のほうへといそいでいた。

おおくの人は、このはげしい風雨のなかを、まるで夏空のもとの庭園でも散歩しているように、おちつきはらつて歩いていく、美しい、幸福そうな目をした娘を、ふしぎそうにふりかえつて見た。

さいふの中身がいつぱいで、いろいろな変わった衣装を衣装だんすのなかにつめこんでいるご婦人がた、あなたがたにはわかりはしない。美しいものに永遠にあこがれるだけでくさなければならぬということが、どんな思いのものかということが——一枚の紫色のドレスを祭日にまにあわせようとするために、八か月間も食べるものもろくに食べずにくさなければならぬということが、どんな思いのものかということが——あなたがたには、わかりはしないのだ。

雨がふろうと、あられがふろうと、風が吹^ふこうと、雪がふろうと、旋風^{せんふう}が吹きまわろうと、メイドにとつては、そんなことは問題ではなかつた。

メイドは、雨がさももつていなければ、オーバー・シューズももつていなかつた。ただ彼女は、紫色のドレスをもつていた。だから、それを着て歩いていたのである。

雨風よ、いくらでもはげしくなるがいい。飢^うえた心は、せめて一年に一かけらのパンくずくらいは、ほしくなるのだ。雨はメイドのからだをつたわつて、指先からしたり落ちた。

だれかが、町角をまがって来たかと思うと、メイダの前に立ちふさがった。見あげた彼女の目は、贅嘆さんたんと関心にみちた顔をしたラムゼイ氏のきらめく目にぶつかったのである。

「やあ、メイダさんじゃないか」と、ラムゼイ氏はいった。「新しいドレスがよく似合って、まったくすばらしいよ。あなたがダイナーにきてくれなかったので、ぼくはすっかり失望していたんだ。それに、これまでぼくが知っているどの娘さんよりも、あなたはセンスと知性とを身につけている。こうして、あらしに負けないで歩くということくらい、からだを健康にしてくれ、きたえてくれるものはないからねえ。ぼくもいつしよに、あなたの散歩のおともをさせてもらってもいいかい？」

メイダはほおをあらめ、思わずくしゃみをしてしまった。

(オー・ヘンリー著 大久保康雄訳『紫色のドレス』)

(注1) 仕立て代……衣服を注文して縫ぬってもらったための代金。

(注2) 感謝祭……アメリカの祭り。収穫かくに感謝して十一月の第四木曜日に行われる。

(注3) 正餐……正式の献立けんりつによる食事。

問一 — 線部①「紫色のドレスと赤いドレスと——が、ここに用意されかかっている」とありますが、紫色のドレスと赤いドレスはそれぞれ、だれが用意しようとしているのですか。また、二人は何のために用意しようとしているのですか。説明しなさい。

問二 2ページの※印から4ページの※印までの部分「感謝祭の前夜がきた。くすてきだわ。』とありますが、感謝祭の前夜と当日とは、メイドの気持ちはどのように変化しましたか。気持ちは変化することになった事情もふくめて、百字く二百十字で説明しなさい。

問三 — 線部②「家主のおかみさんの舌が、バター・ミルクをひっかきまわす泡たて器みたいに、廊下じゆうを、すっぱくかきみだしていたのである」とありますが、これはどのようなことを表していますか。具体的に説明しなさい。

問四 この文章からグレイスとシュレーゲル氏はどのような性格だと読み取れますか。それぞれ一点ずつ挙げて説明しなさい。ただし、どこからどのように読み取れるか、その根きよもふくめること。

問五 — 線部③「あなたがたには、なぜメイドが感謝祭の日のつめたい雨を感じもしなかったか、わかるはずもないのだ」とありますが、「あなたがた」は、どのようなことを理解できないのですか。その理由もふくめて六十字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

石の道具から鉄の道具へ移り変わることは、人びとの生活や社会にどのような影響をもたらすのでしょうか。

これは遺跡から発掘された石の道具、鉄の道具を見ているだけではわかりません。じつは、一九五〇年代に、パプアニューギニアやオーストラリアで石から鉄への移り変わりを研究した研究者がいます。パプアニューギニアでもオーストラリアでも、石から鉄への変化は一九世紀から二〇世紀にかけて起こった変化なのです。

ニューギニアの東部高地に、「シアネ」ということばで挨拶をするということとでまとめて扱える人びとがいます。シアネの人びとはサツマイモやそのほかの農産物をつくり、ブタを飼っています。

かれらはかつて石器を使っただけで済んでいました。男も女も起きている時間の八〇パーセントは生きるための労働をしなければなりません。斧は完全に男のもので、労働には石斧を使いました。新しく畑をつくるために森を伐採するとか、木を倒して垣根をつくるとか、建物を建てるということが男の仕事です。女の仕事は育児、食事づくり、ブタの世話といろいろあります。

そこへ鉄の斧が入ってきました。鉄の斧を使うのはどうぜん男です。女のほうは斧は使っていませんから、ぜんぜん関係ありません。①鉄の登場は、男だけを解放する結果に終わりました。

そこで、考えてみましょう。重い石の斧と、それにくらべれば軽い鉄の斧では、どのぐらい効率がちがうと思いますか。答えは一对四です。つまり、石の斧で四〇分かかっていた仕事は、鉄の斧で一〇分です。石の斧で一本倒す時間に、鉄の斧なら四本倒せるということです。刃をときなおす時間は計算にいれませんが。

鉄の斧が入ってきたことによって、シアネの男たちは、いままで八〇パーセントの時間を働かなければならなかったのに、五〇パーセント働けばよくなったのです。三〇パーセントの時間が浮きました。では、浮いた三〇パーセントの時間をかれらはどう使ったのでしょうか。

それまでは自分のごく親しい人びとの祭りにしか出席できなかったのが、時間が浮いたので、それほど親しくない人の祭りや儀式にも出席するようになりました。祭りや儀式には宴会がつきものですから、宴会への出席が多くなります。宴会でいちば

んのごちそうはブタですから、ブタの消費量が多くなります。すると、村はずれに飼っているブタやよその村のブタを盗むということがはじまりました。ブタ泥棒が増えてきたのです。その結果、村と村とのいさかいがおきる、つまり戦争がおきるようになりました。石から鉄への変化は、^②宴会を増やし、ブタ泥棒を増やし、戦争を増やしたのです。しかも、男たちだけが鉄器時代を迎えたのであって、女たちは石器時代のままでした。これがシアネの人びとのあいだの石から鉄への変化の結果でした。

つぎに、オーストラリアのヨーク半島のつけね、西側にいたイル・イヨロント族の変化を見てみます。

かれらは食料採集民で、狩りをしたり木の実を集めたりという生活をしていました。かれらにとっても石斧は男のものでした。奥さんや子供が借りることはできませんでしたけれど、借りるとき、返すときのあいさつは、夫は妻に、父は子に優位に立っていることを確かめる機会でした。そこへ白人がやってきて、鉄の斧が入ってきました。イル・イヨロント族の人びとが白人の手助けをすると、その代償として鉄の斧をくれたりします。ときには、奥さんが鉄の斧をもらうことがあります。夫のほうは石の斧しかもっていないのに、奥さんが鉄の斧をもっていることになりました。そうすると、「すまんけど、おまえの鉄の斧を貸してくれ」ということもおきてきます。このようなことから、意外や意外、^③石が鉄に代わったことが、夫が上に立ち、妻が下にいるという上下関係をくずしていったのです。これが石が鉄に代わったこととおきたさまざまな結果の一つです。

もつと重要なことは、イル・イヨロント族が浮いた時間をどう使ったかということ。この点にいま私は大きな関心をもっています。

浮いた時間を使って、なんとかれらは昼寝をしたのです。私はじつは、その部分を読んだときに吹き出してしまいました。この笑いには軽蔑の意味もふくまれていたと思うのです。^④ところが、私のこの感想はじつはまちがっていた、といまは思っています。

二〇〇〇年前、日本ではどうだったでしょうか。石から鉄へと変わってきたときに、弥生人はおそらく浮いた時間で宴会に出席することも、昼寝をすることもしませんでした。石から鉄への変化を、生産力の飛躍的な増大につなげたのです。いままで石の斧が一本倒している時間で、四本倒すというぐあいに、すくく生産力を高めたのです。

四世紀、六世紀（古墳時代）の農民が働き者だったことは、群馬県で火山の噴火や洪水の直後に復旧工事にとりくんだ証拠からわかっています。また、日本の農業が草をとればとるほど、よい収穫を約束される農業であることから、弥生農民が働き者

だったことを、私は予測しています。

パプアニューギニアやオーストラリアでは浮いた時間を遊びに使ったのに、日本では労働に使ったということで、日本人は勤勉だと先祖をほめたたえるつもりか、と思われるかもしれません。そうではありません。

道具や技術は、毎年のようにどんどんすぐれたものになっていきます。なんのためだと思えますか。質問すると、すこしでも楽になるようにとか、効率がよくなるようにとか、企業がもうけるためだとかいう答えがよくもどってきます。しかし、結果から見ると、私はそうではない面もあると思うのです。

じつは、私たちが忙しくするために道具や技術は発達してきているのではないのでしょうか。それまで一〇時間かかったところを、三時間で行くことができるようになったとします。浮いた七時間をどう使うかと考えてみると、ほかの仕事をしているのです。

すくなくともつい最近までは、歩いている時間とか車に乗っている時間はボケーツとしていたことができました。あるいは空想にふけることができました。しかし、いまや携帯電話ができたのです。歩いていても、車に乗っていても、いつ電話がかかってくるかわかりません。相手からだけでなく、自分からもかけます。なにもそんなときまでと思うのですが、そんな大人たちが増えています。

私たちは、技術や道具の発達は自分たちを解放するためだと思っていますが、じつは大きな誤解で、自分たちを忙しくするために技術や道具が発達している面もあるのではないかと思うのです。そこで私は思うのです。オーストラリアのイル・イヨロント族が浮いた時間を寝たというのは、正解だ、と。

多田道太郎さんは、つぎのようなことを私に語ってくれました。

日本には「休む」とか「怠ける」ということばがあるけれども、みんな悪い意味で使われている。しかし、私たちは、むしろ強制されたことはなにもしないという状況に自分をおくことがたいせつだ。そういう状況のなかで、自由にしたいことをする、それが遊びだ。

多田さんのいうことのなかに、私にとってひじょうに重要なことがふくまれていました。それは、強制されている状況からは空想力がはばたくはずがない、休んではじめて人間の構想力とか空想力がはばたくのだということです。働きづめに働いている

と、そのあげくに出てくることは、しよせんたいしたことはないのだということです。空想力は想像力とおきかえてもいい。アインシュタインが知識よりも想像力のほうがずっとたいせつだ、といっていることを思いだします。

たしかに日本人は働きすぎると思います。私たちはもうすこし余裕よゆうをもつて、いい意味での怠惰たいだの精神、遊びの精神で生きていくべきではないでしょうか。これをなによりもまず自分自身にいいたいと思います。もつと余裕をもつて、遊びをもつて生きていったらいいのではないか、それをイル・イヨロント族に学びたいという思いなのです。

(佐原真『遺跡が語る日本人のくらし』)

問一 —— 線部①「鉄の登場は、男だけを解放する結果に終わりました」とありますが、「解放する」とは、ここではどのようなことですか。十五字以内で説明しなさい。

問二 —— 線部②「宴会を増やし、ブタ泥棒を増やし」とありますが、宴会が増えるとブタ泥棒が増えるのはなぜですか。説明しなさい。

問三 —— 線部③「石が鉄に代わったことが、夫が上に立ち、妻が下にいるという上下関係をくずしていったのです」とありますが、なぜ上下関係がくずれていったのですか。石斧のころと鉄斧が入ってきた後の上下関係がどうなったのかをふくめて、説明しなさい。

問四 —— 線部④「ところが、私のこの感想はじつはまちがっていた、といまは思っています」とありますが、「この感想」がまちがっていたと思うのはなぜですか。説明しなさい。

三

次の各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) この地域は、塩のセイセイがさかんだ。
- (2) 国民の生活をホシヨウをする。
- (3) その仕事は部下のサイリヨウにまかされた。
- (4) キリツを守って生活する。
- (5) 薬のフクサヨウをおさえる。

